

の心配りのもと、冷えた体を休めることになった。

この観測結果がどれ程の意味を持つのか、どこまでが信用可能か、考えだすときりがないように思う。しかし、厳寒の中での気候観測という、生

涯一度であろう経験は貴重であると同時に、級友のいろいろな面が見れ意義深かったと思う。

(10月4～6日 田宮教官指導)

富士北麓巡検

大小田 恵子

10月2日・3日と1泊2日で行われた富士北麓巡検は、私達1年生にとっては初めての巡検であり、期待7割、不安3割という心境だった。何しろ地形学やら何やらの知識を全くといって良い程持ち合わせていない未熟者達で、2日間の内容を消化し切れるかどうかとも不安な有様である。それでも、プリントに記されていた「巡検のポイント」が「フィールドワークの練習」だったのと、先輩の話を自分に都合良く解釈していたのとで、「とにかく行って、歩けばどうにかなる」という程度の認識で出かけたのだった。

そんな様子だったから、宿舎に着いてすぐに歩き始め、最初に驚いたのは、浅海先生の「健脚」ぶりだった。道端の岩石やルートについて、時々足を止め、説明をされながらであったが、とにかく速い。まごまごしている私達を尻目にさっさと次のポイントへ向かってしまう先生を、負けてはならじとメモを片手にだだだど走って追いながら、音に聞こえた浅海先生の「健脚」とはこのことかと思ひ知り、これは思いのほかキツイ巡検になるかもしれないとため息をついたのだった。

私達が歩いている道のそこここには、溶岩が固まったものだという黒っぽい岩石があった。知らずに見ればただの岩だが、これが「富士山のカケラ」だと言われると、何となく不思議な気がしてしまう。また、時々小さな畑に野菜が植えてあったりする。富士北麓にもやはり耕作地は希少だそうだが、こんなところに畑があることが、火山の麓という作物の育ちの悪いやせた土を想像してしまう私には意外だった。

1日目は思わぬハプニングで予定が狂ってしまい、西湖民宿村や元根場部落跡に行けなかったのが残念だが、そのかわり樹海遊歩道をゆっくり歩きながら、木の根元に不自然にぽかっと口を開い

た洞穴や、溶岩樹型を見ることができた。溶岩樹型は、溶岩が倒木を覆って固まった後木が腐ってなくなり、木の形だけ残ったものということだ。セミナーの夜にスライドで見たような、年輪まで分かるものを私は期待していたのだが、そこまではさすがに無理だった。

2日目は宿舎をバスで出発し、まず白糸の滝へ向かった。お天気のせいもあってか水が青く、それが滝つぼの深さを物語り、恐ろしい程の美しさだった。ここは、風化のため粘土化した古い泥流の上に隙間の多い新しい溶岩流がのっているの、両者の間から地下水が湧き出し、滝を作っているそうだが、何の作為もなく、成りゆきだけでこんな美しい景観ができてしまうことに感心した。

次の畜産試験場では、牛の写真がずらりと飾られた部屋で係の人のお話を聞いてから、施設を見せて頂いた。ここでは主に牛の飼育に関して、特に飼料の種類、与え方や品種改良について研究し、実験等を行うそうで、成程敷地内には沢山の牛が飼われていて、ぞろぞろ歩いて行くよそ者達を、気のせいかもの珍しそうに見ていたようだ。

またしても時間がなくなり、鱒の養殖場をゆっくり見学できなかったのが残念だったが、この日の昼食は浅海先生のお薦めの鱒料理屋さんでとった。こういう時は皆疲れを忘れて歓声をあげる。手塩にかけて(?)育てた鱒を料理するのに抵抗はないのだろうか、と馬鹿なことを考えた私も、一瞬後には忘れて元気に食べてしまったのだった。

結局、全体を通して遠足気分が抜け切れず、浅海先生も手を焼かれたことだろうが、私にとっての今回の巡検の成果は、富士山を火山として認識するようになったことだ。今まで、富士山の活動に関する文章を読んでも実感はなかった。しかし、麓を蟻のようにはい回っただけとはいえ、自

分の足で歩き、手に触れてきたのは、ただ美しいだけでなく、激しさの片鱗を伺わせる富士山の一面だった。あの湖には昔、赤熱の溶岩流が水煙をあげてなだれ込んだだろう。今はコウモリでも住みそうな洞穴にも焼き払われた木がいぶっていただろうし、檜や松の生い茂る青木ヶ原樹海も、か

つては荒涼としたむき出しの溶岩流だったのだろう。そんな想像をしながら、家の窓から富士山を眺めるのも、以前にはなかったことであり、ささやかながら収穫といえるのではないかと思っている。

(10月2～3日 浅海教官指導)

赤坂・麻布巡検

鈴木 順子

本校の開学記念日である11月29日の9時、虎ノ門・文部省教育会館集合。私達2年生にとっては3度目の1日巡検である。天候はあいにくの雨であった。傘をさして強風に立ち向かいながら歩くこと十数分ののち、赤坂アークヒルズ内のアーク森ビルに到着、会議室のようなところで説明を受けた。

新しい時代のニーズにこたえるべく誕生したインテリジェントシティ——全環境都市——と称するアークヒルズは、56000㎡の敷地に住居、ホテル、TV局、ホール、広場、事務所などが有機的に配置されている。高度情報化社会に対応した、まさに快適なひとつの“街”である。もともとこの赤坂・六本木地区は坂が多く、道路は狭く曲折し、老朽化した住宅が密集していて、防災上の問題があった。そこでこの再開発事業が行われたのである。とはいえ以前の住民でアークヒルズに残っている人はあまりいないそうだ。家賃が月何十万円もしたら、そのまま住み続けることのできる住民の数にも限りがあるだろう。それにしてもここアークヒルズの交通の不便さには問題があるように思える。JR、営団各駅どこからでも徒歩10分以上はかかるというのだから。

さて、説明を聴き終えて屋外に出ると天候はいっそう悪化していたので、寛容な栗原先生はなんと残りの日程を別の日にしてくださった。そのようなわけでこの日は11時頃に解散となった。

1日巡検の2日目？は12月23日に行われた。晴れた穏やかな日であった。今度は10時にJR田町駅に集合、昔ながらの学生街を通して慶応大学へ向かった。赤レンガの慶大の図書館は明治45年に建築されたゴシック様式の建物で、重要文化財に指定されている。慶大の門を出て、坂をずっと登り、次は三井倶楽部へ。が、中には入れてもらうことができず、麻布方面へ向かい、以前は材木を舟で運んでいたという古川を渡った。大イチョウで有名な善福寺に着くと、福沢諭吉や越路吹雪の墓が私達を驚かせた。この後、賢崇寺で解散、昼食の後、麻布十番の商店街から六本木方面へ。高級住宅地となっている狸穴、ソ連大使館や日本経緯度原点（元東京天文台）などのある麻布台を通り、飯倉片町のスペイン村に足を踏み入れた。建物は古く傷んではいるものの、本当に西洋の雰囲気を感じる一角であった。また坂を登り少し歩いてここで解散となった。

赤坂・麻布・六本木というと、様々な面で最先端をいく街、というイメージが強かったが、実際自分の足で歩いてみると意外に昔の面影が残っているものだった。しかし、それらの地域もいずれは再開発を行うのであろう。

この巡検では再開発のなされたアークヒルズと、昔のままの麻布の家々がとても対照的で、特に印象に残った。

(11月29日・12月23日 栗原教官指導)